

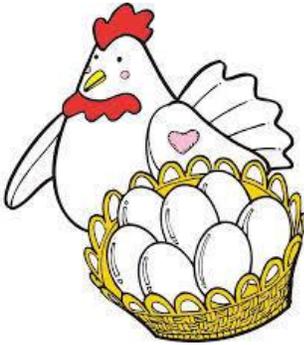


わかば

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm>

毎週火曜日更新

大寒の卵



オレゴンで生活していると忘れてしまいそうですが、1月の下旬から2月の中旬にかけて、日本ではこの時期が一年中で最も寒い時期です。「朝起きるのが辛いな。」「学校に行くのがいやだな。」と思ったりする人が出てくるのもこの時期です。この寒い時期ですが、よいこともあります。この時期の水は、寒いので雑菌が一番少ないそうです。雑菌が少なく、体に良い状態なので、味噌・醤油・お酒などに使われる水はこの時期にくまれたものが多いそうです。1月20日頃(今年は1月21日)を大寒の日といい、大寒の日に生まれたニワトリの卵は、「大寒の卵」と呼ばれます。この卵を食べると、体の健康にとてもよいという話です。でもいったい「大寒の卵」がどうして健康にいいのでしょうか。それは1

年で最も寒いこの時期(大寒の日)、寒さのため、ニワトリも水を飲む量が減るそうです。水を飲む量が減る代わりに、餌をたくさん食べるのだそうです。そのため、餌の栄養分が普段よりも十分に卵に現れ、一年の中でも「最も濃厚でおいしい卵の味」になるからだそうです。栄養のあるものを食べるというのは、大切なことです。

オレゴンは穏やかな冬ですが、アメリカ東海岸や日本では寒さが続いています。それでも、ふと外を見ると枝の先につぼみが膨らんでいました。春がそこまでやって来ている、そんな予感がします。

今年度の授業日も、あと4日となり、1年間のまとめの時期になりました。本日2月20日(土)には小学部後期テストが実施され、2月27日(土)には全校学力テストが実施されます。その他にも単元テストや漢字のまとめのテスト等、いろいろなテストが予定されています。

全校学力テストは、各学年における総合的な学力を診断するテストで、今年度学習したこと全てについて、基礎的・基本的な内容が出題されます。広範囲ですので、やり残しが無いよう、全体を通して復習をしておく事が大切です。満足のいく結果を残すことができるよう、丁寧に学習しておきましょう。

このテストは、自分の現在の学力を把握する大切なテストです。一年間の学習の締めくくりとして「最後の一頑張り」を「大寒の卵」でも食べながらしてもらいたいものです。



【トイレの使い方】

気持ちの緩む時期なのではないでしょうか、昨年もこの時期に、同じ文章が掲載されていました。ペーパータオルがなかなかゴミ箱に入らず苦戦しています。小学部が使う3か所のトイレは、時折誰かが拾ってきれいにしてくれるときはありますが、写真のような状態のことが多くなっています。ただし、幼稚部・中等部・高等部が共同で使用しているトイレは1年を通じていつも大変きれいな状態でした。日本の学校ではペーパータオルをトイレに常備している所はほとんどありません。ありがたさを感じ、落ち着いてトイレを使用するときとよくなると思います。トイレはいつもきれいだとうれしいですね。

こんなに違う同じ話

(勝海舟)

江戸時代末期から明治時代初期に活躍した「勝海舟」についてのこんな逸話が残されています。今も大変ですが、この頃の外国語の学習は本当に大変だったようですね。

海舟がある本屋の店頭でオランダの兵書を見つけ、その本の値段を聞いたところ50両でした。あちこちをかけずり回って金策に成功し、喜んで本屋に行くと、もうその本は売れてしまっていました。諦めきれない海舟は、本屋の主人から買い主の名前を聞き出し、その足で買い主の家を訪れ、その本を譲って欲しいと申し入れます。しかし、申し入れは断られました。諦めきれない海舟は「それならばらく拝借させてはもらえませんか」と頼みますが、「この本は自分が読みたいので、お貸しするわけにはいきません。」と断られます。この辺で諦めて引きさがるのが普通ですが、海舟は一向に諦めません。「それでは、あなたがお読みになる間はその本がご入り用でしょうが、就寝後の時間はその本はお空きでしょう。その空いている時間に貸していただけませんか。」とくいさがって頼んだのでした。相手もさすがにこれには折れて「それならば、午後10時過ぎには床に就くので、午後10時から翌朝までお貸しいたしましょう。ただし、貴重な書物ですので門外不出、この家に来て読んでいただきたい。」と答えたのでした。そこで海舟はおよそ6キロの道を毎日通い続けて、半年かかってその書物を全部写し取ってしまったそうです。



1860年咸臨丸で渡米時にサンフランシスコで撮影

この逸話と全く同じ話を別の本はこのように記しています。

海舟が蘭学（オランダ語で日本に伝えられた西洋の学術を研究する学問）をはじめから二年ほど経った頃、長崎にあるオランダ商館長ゾーフ＝ハルマがつくった58巻に及ぶ日蘭辞典「ゾーフハルマ」を持っている人が江戸にいることがわかりました。海舟はこの頃、専門の兵学書を読みこなすためにオランダ語の辞典を必要としていました。勉強したければ、どんな参考書でも簡単に手に入る時代とは違って、たった一種類しかない日蘭辞典で、60両という高い値段が付いていました。海舟はひどい貧乏暮らしでしたので、それを買えるようなお金はありません。そこで「ゾーフハルマ」を持っているオランダ医者の赤城の家に出かけ、「ゾーフハルマ」を書き写させて欲しいと頼みました。しかし、「この本は自分が必要な大切な書物で、お貸しするわけにはいきません。」と断られます。「同じ蘭学を学ぶ者のために、何とかお願いいたします。」あまりにも熱心に、どこまでもくいさがる海舟に、赤城先生もその気になり、辞典を貸してくれることとなりました。辞典を借りる代金は10両ということになり、海舟はついに「ゾーフハルマ」を借りることができました。1年間かけて寝る間も惜しんで2部書き写しました。筆写といっても、「ゾーフハルマ」は3千ページ、語数9万余もありました。これを一言一句、しかも2組筆写するのは並大抵の根気ではできません。手製の陶砂を紙にかけて惨みを防ぎ、家鴨の羽を削ったペンに、インクも自家製。くる日もくる日も机に向かい、粉骨砕身の1年を送ったのです。2組作成した筆写は、1組を自分用に、もう1組を売却して、10両返済と諸経費にあてたのです。

全く同じ話が、こんなに違った内容で後生に伝えられるとは、さすがの海舟も想像しなかったことと思います。

海舟と書物との関係ではこんな話も残っています。

海舟は本屋の主人から同じく本好きの函館の商人、洪田利右衛門を紹介され、友人となります。利右衛門は函館で海産物と材木を扱っている商人です。子どもの頃から本が好きで、一時期は親に本を読むことを禁止されていたりもしましたが、家の商売をしっかりとするなら読書をしてよいと許された経験の持ち主です。この利右衛門なかなか人物で、「函館にいてはなかなか珍しい本や面白い蘭書に出会う機会が少ない。珍しい本を買って読んだ後に私の所に送って下さい。面白い蘭書があったら翻訳してこの罫紙に書いて下さい。」と言って200両と罫紙を海舟に託したそうです。当時の函館には素晴らしい人が居たんですね。